中世地方寺院の展開

——特に越前善妙寺の場合——

地方寺院と中央の本寺との関係については、草創以来の本末関係が近世まで継続して見られる場合や、近世になって新たな関係が生ずる場合等様々である。近世初頭本末組織の確立と共に、教団組織の充実を見るわけであるが、一個の寺院について中世に遡りその展開を窺ってみると、独自の存在していたことが多く、必ずしもその教団としての特徴が見られるわけではない。本稿で取り挙げる越前善妙寺は、現在福井県敦賀市神楽町に位置する浄土宗寺院で、約四〇点余りの古文書を所蔵している。この善妙寺文書は山本元氏によって早くから注目され、昭和十八年に『敦賀郡古文書』に収録されていたが、近年『敦賀市史』史料編第一巻に一層完備した形で収載された。所蔵点数が少ないために、詳細なる善妙寺の寺史を解明することは困難であるが、中世善妙寺の寺院的性格を考察し、併せて近世初頭に至るまでの過程を考察したい。

中 野 正 明

善妙寺には元禄九年（一六九六）四月日付善妙寺由緒書（以下、由緒書と称す）があるので、つぎに掲げてみよう。

越前国〔敦賀郡天〕□□□□簡山善妙寺由緒書

一、開山（空覚上人）生所・姓氏・移住・行年之儀者不詳、付法之師者心寂坊、

一、寺起立後深草院御宇正元元己未歲、塔頭十四軒、寺領三百石余、但今者没取、

一、鎮守 氣比大神宮并寺宝肉付之仏舍利、但青色之大粒分落三百余、從開山（代々）相伝之靈宝、

一、開山遷化者文永三丙（五月）六月廿八日、右開山系図之卷物并寺領之御判物・寺宝等者、建武年中之兵火焼失仕、其已後、

一、応永三歳京都將軍義満公御判物・知行目録一通、

一、応永年中越前守護斯波武衛判物・祈願之状一通、

亦弘治三歳三月廿四日炎上、

已後

一、永禄元年朝倉九郎左衛門尉景紀裏判領知惣目錄一卷、

一、永禄九年朝倉景恒当寺法度書裏判一通、

一、元亀四年越前守護朝倉義景寺領之判物一通并制札一通、

右元亀年中迄者知行無相違一寺納仕候処、天正年中之兵乱已後

寺領無し之、剩代官武藤助十郎支配之時寺地過半被取上、寺院共

ニ衰微仕候、

元禄九丙子四月日

越前国敦賀

善妙寺卅三世

得誉聖俊(花押) 匱

本山浄花院

御役者中

この由緒書は、近年『増上寺史料集』第五・六・七巻に所収刊行された「浄土宗寺院由緒書」の善妙寺の項(第五巻『浄華院由緒記』、浄華院を縁由して増上寺に現蔵)との対校を試みると、内容・文体共に一部の改変を除いて殆どの一致を見ることから、元禄八・九年に浄土宗の総録所たる増上寺の役者が、寺社奉行の命によって全国浄土宗寺院の由緒、開山の来歴等を調査した際、善妙寺が本山浄華院に提出したものの控であることがわかる。善妙寺には他

に同年四月七日・八日・九日付で、大信院・良閑寺・小谷寺・真正寺・長福寺等の末寺からそれぞれ提出された由緒書もあるが、これらは本山浄華院に提出されなかったたのであるうか、「浄土宗寺院由緒書」には収載されていない。しかるに、近世初頭の善妙寺は五カ寺の末寺を有し、京都浄華院の末寺であったことに相違ない。

二

開山空覚について由緒書では付法の師を心寂房としている。『法水分流記』(大谷大)によると、法然の弟子西仙に心寂と註記されているからこれを指すものと思われる。さらに心寂房について、『四十八巻伝』には、もと寂空の弟子での中に法然を師として一向専修の行者となったとある。つまり法然とは同法に当ることになる。そして河内国讃良の尼入道に対する教化の様子を記している。そうした由緒からであろうが、「浄土宗寺院由緒書」によると河内国岡山大正寺の開山がこの心寂房となっている。ところが開山空覚についての記載は、これらの文献にも見当たらないのである。しかも由緒書には、開山空覚の系図巻物や寺領判物・寺宝等を、建武年中の兵火によって焼失したとしている。また空覚の没年とする文永三年の干支を「丙丑」と記しているが、これは明らかな誤記であって「丙寅」でなければならぬ。このように、開

山空覚の来歴に関しては疑問な点が多いように思う。

つぎに成立年代について考えると、由緒書には正元元年（一二五九）となっているが、それは開山を空覚と容認できる場合であつて、今は当時の古文書によって考察を進めてみたい。そこで明徳五年二月日付左近将監棟忠寄進状には、

善妙寺奉寄進 下地事

合老町式段六十步者 在所横浜老石二斗代、但此内一段文字依有地類不相副也

右田地者、任三如還禪尼遺言、本所御下知并文書七通相副善妙寺

永代寄進処実也、然者如還禪尼後生苜無退転可被訪者也、仍

寄進状如件、

明徳五年 甲戌二月日

佐近将監棟忠（花押）

とある。この文書は確実に善妙寺に宛てられたもののうち最初のものであるが、これによると、棟忠なる者が善妙寺に対して一町二段六〇歩の田地を寄進していることがわかる。そして如還という者によって、善妙寺に対する土地寄進に關した遺言があつたようである。そこで嘉慶二年八月十三日付如還遺言状には、

このほど申候やうに、（下地）したちどもをば、（寺）てらにてもたうちやうにても候へ、（興行）こうきやう候て、（丹）一ゑんにミなく（普々）よせて給候へく候、（面々）めんくにもこのやう申て候、よのいろい候ましく候、（文書）もんそみなく（添）そへて、のちのために申おき候、あなかしこ、

かきやう二年 （嘉慶）

八月十三日

大たにとのへ （殿）

如けん （遠）（花押）

とある。宛名について問題はあるが、如還は寺院であつても道場であつてもその興行のために、下地を一円に寄進し、誰にも干渉させないと言ひ遺している。それが明徳五年善妙寺創建のために寄進されることになつたものと考えられる。これ以前に前身となるものが存在したかどうかはわからないが、善妙寺の成立は、明徳五年よりそれ程遡らない頃と推察できよう（ただし寄進された田地横浜と現在の寺地とはかなり距離があり、この土地を善妙寺草創時の敷地と連断するのは疑問にも思う）。

ところで、由緒書の判物・知行目録についての記載を、現蔵する古文書と照合してみると、応永三年將軍足利義満判物・同知行目録各一通、応永年中守護斯波義将祈願状一通等を除けば、すべてその存在を確認することができる。しかし確認されないこれらの文書については、弘治三年三月二十四日炎上したと註記している。永祿元年五月一日付天野景重請文に「寄進状去年之火事ニ焼失之由候条、」とあり、弘治三年に火事のあつたことは事実と思われる。しかし、由緒書の註記はこの天野景重請文の火事の記載を意図的に利用して、前年の弘治三年を当てたようにも疑いが持たれる。それにしても、永祿元年六月五日付善妙寺々領目録によつて、中世末期の善妙寺領を換算すると、常住分一〇町六段一

二〇歩、塔頭分一四町八段、總計二五町四段一二〇歩にもなる。また阿弥陀院・正行庵・釈迦院・宝寿院・蓮藏院・潮音軒・勝養軒・玉祥院・陽栖軒・玉照軒・成就院・玉淵軒・清沢軒・永福庵等一四軒の塔頭それぞれに院領があつたのである。由緒書は草創と同時に塔頭一四軒が存在したように記しているが、そのようなことはあり得ない。一般的に寺領の拡張と共に経済的にも發展し、塔頭の数も徐々に増えてくるものである。このように成立・發展の様子を考えても、由緒書の扱いには慎重でなければならぬことがわかる。由緒書の筆者が實際の古文書の内容との一致を計りながら、由緒付けをした部分もあるように思われるからである。

三

越前敦賀には草創以来中世末期まで、淨華院を本寺と仰ぐ淨土宗一条派の寺院西福寺がある。西福寺は開山良如以来代々本寺淨華院と深い関係にあつた。³⁾中世の善妙寺も、前述したように果して淨華院の末寺と考えてよいのであろうか。とすれば、一条派の展開について、再度見直す必要も生じてくる。しかし、善妙寺の『過去帳』に見られる歴代住持は、淨華院や西福寺と全く関係がないし、応永三年三月二十八日付斯波義将安堵状の寺領注進目録に、「御読経所」「般若所」等の記載が見えるが、これらは善妙寺が密教系寺院であつた可

能性を示唆しており、少なくとも淨華院や西福寺等と同じ系統の寺院には思われない。善妙寺には由緒書と同じ元禄九年四月に得誉聖後の記した善妙寺本尊由来がある。これを見ると聖俊は開山の空覚が氣比神宮に參詣して有縁の尊像を請うて祈つたところ、この阿弥陀尊像を授けて下さつたとし、その神慮の貴さに念仏して謝すべきであると記している。そして氣比神宮が金剛界の大日如来であることは、弘法大師參詣の折に明らかにまつたとし、境内は大日如来の密嚴淨土であつて、大衆はこの大鳥居を通れば淨土に往生できると説いている。これは神仏融合の表現に他ならない。恐らくは、聖俊が書上を記述するに當つて、由緒付を意図して作成したものと考えられる。したがつて、中世の善妙寺はどこにも属さない兼学寺院であつたと見るべきように思う。草創後独自の展開を経ながら發展を遂げ、近世になつてから淨土宗の淨華院を本寺とするようになったのであろう。

1 宇高良哲氏『増上寺史料集』第七卷「淨土宗寺院由緒書解題」参照。

2 水藤真氏『人物朝倉義景』第五の一「所領安堵―善妙寺領の場合」参照。

3 拙稿「中世淨土宗寺院の展開―越前西福寺と京都淨華院との関係について―」（『日本仏教史学』一六）参照。

（華頂短期大学講師）